

1 鞭家住宅の概要

1. 1 鞭家住宅の沿革

鞭家住宅の創立年代を明らかにするような資料は発見されていない。しかし、平面形式や小屋構造等により19世紀前期の建物と考えられる。その後も大きな改造もなく近代を迎えたと考えられる。明治の末頃には入口北側の部分を曾祖母の部屋とするため「ニワザシキ」に改築している。また、大正年間には「オク」の東側に「シンダチ」と呼ぶ部屋を増築している。昭和2年には、丹後大震災に遭い建物全体に歪が発生したようで、ボルト等の金物や筋違を用いて、軸部を固定している。また、四周全体の側柱の取り替えやアルミサッシの取り付け、「ダイドコロ」北側土間を「台所」に改修するなどは、昭和40年代以降のことと考えられる。

2 建物の概要

2. 1 構造形式

概 要

鞭家住宅は、桁行8間、梁行5間の大型の住宅で、入母屋造、茅葺、平入。四周の大部分は椽瓦葺の下屋庇が廻る。

平 面

東面して立ち、北側が本来土間となる。現在は土間部分を分割し、表側を「通り庇」と「ニワザシキ」に、背面側を「台所」と通路としている。部屋部分は表側3室、背面側4室の7間取りとなる。表側は北より「マチアイ」、「ゲンカン」、「オク」と続き、「オク」の表側にトコ・タナを構える。背面側は北より、「ダイドコロ」、「ナンド」、「4帖半」と取り、「4帖半」の背面に「カミニイバ」が接する。「4帖半」は炉が切っており、茶室として利用していたと言い、西面に床と書院が付属する。「オク」と「4帖半」の南側は縁となり、西端に便所が突出する。「ダイドコロ」、「ナンド」などは入側筋に胴差が取り付けが、建具を建てた痕跡が無いことより、当初より庇部分を部屋内に取り込んでいたと考えられる。

軸 部

当初の柱は、細面取の檜の角柱を用いている。「オク」、「4帖半」の三方と、「ゲンカン」、「マチアイ」、「ダイドコロ」の一部に内法長押が用いられ、他は胴差で固められている。丹後大震災の後、ボルト等の金物や筋違を用いて、軸部を

固定している。

床

各部屋は畳敷。縁側は板敷とする。「ダイドコロ」はもと板敷の可能性が
ある。

柱 間

ほとんど後世の障子・襖・アルミサッシ等が嵌る。「ダイドコロ」、「ナンド」
境に古い板戸があるが、当初からのものであるかは不明である。

天 井

「オク」、「ゲンカン」に創建当初の棹縁天井が残る。「ダイドコロ」は曲り
の強い梁を掛け、その上部に縦横に小梁を載せ、竹すのこを張る。梁の組み方
より19世紀初め頃の建築と考えられる。

壁

「ダイドコロ」は創建当初からの中塗仕上げ、他の部屋内は漆喰仕上げが施
されている部分が多いが、いずれも後世の修理によるものと考えられる。

小屋組

当地方で一般的な扱首構造を用いている。

屋 根

屋根形式は入母屋造で、棧瓦葺きの庇が取り付く。当地方で古い民家に用い
られている葉の付いたままの篠竹を用いた茅葺きである。棟は杉皮と竹を用い
て包み、馬乗りを9組載せ、押えとしている。

妻

妻には板破風を張り、かぶら懸魚をつける。

3 建物の特色

これまでの丹後型民家の特色は、以下の点が指摘されている。

- (1) 土間に面した部屋は、梁行全体を1室とする「だいどころ」(広間)と
する
- (2) 「だいどころ」の奥を「おもて」と「へや」の2室とする

- (3) 「おもて」の妻側^{つまがわ}に仏壇^{ぶつだん}・床^{とこ}等を設ける
- (4) 「だいどころ」を前後に分けるのは、明治以降と考えられる
- (5) 「だいどころ」を前後に分ける間仕切り^{まじきり}は内法^{うちのり}鴨居^{かみい}下^{した}のみ障子^{しょうじ}を嵌めるものが大半で、内法上を壁とするものはない

しかし、鞭家住宅では丹後型民家の特色とまったくことなる部分が存在する。平面的な特徴は以下の通りである。

- (1) 7間取りの平面であり、大規模である
- (2) 式台^{しきだい}玄関^{げんかん}が取り付く
- (3) 「オク」の表側^{とこ}に床^{とこ}と棚^{たな}がつく
- (4) 「オク」の後に「四帖半」の茶室を設ける
- (5) 「オク」と「四帖半」に、杉^{ゆぎ}の面皮材^{めんかわざい}の長押^{ながおし}を用いる
- (6) 表側の3室と裏側の部屋境にズレが生じている
- (7) 「ナンド」以外の部屋には、胴差以外の部分に内法長押が取り付く

以上のような点は、鞭家が古くから医師として活動していたことと関係があるとも推定できるが、詳細に付いては今後この住宅建設に関する資料等が発見されたときに再考される問題と考える。

後世の改造については以下の点が指摘できる。

- (1) 土間部分を前後に分割し、表側に「ニワザシキ」、背面側を「台所」に改造する
- (2) 四周とも側柱がすべて中古材に取り替わっている
「オク」の表側に先代が診療室とした「シンドグチ」を増築している

4 評 価

丹後地方における大型の民家である。建立年代は19世紀前期と考えられ、平面等に当地域に例のない形式が見られるなど、その歴史を考える上で貴重な建物である。母屋部分の柱・梁等の構成部材もよく残っていること、土間の改築部分も後補材を撤去することにより、創建当初の復原も可能と考えられる。

ただし、四周の柱・建具等すべて後世の改造を受けている点で、外部からの景観に近代的な部分が目に付く。

今後、鞭家や当住宅に関する古文書や棟札^{むなづか}等が発見されれば、さらに高い価値付けが可能になると考えられる。

以上、鞭家住宅は、野田川町において歴史的・建築的な価値を有していると結論付けられる。